Camp1(5,800m) より、マナスルのイースト・ピナクル (7,992m) を望む。あの切っ先から8m上に行けば8,000mの世界に達する。どんな世界が待っているのか、どんなルートで繋がっているのか、迫力いっぱいのクレバス迷路を前にして胸が高鳴った。

世界第8位の高峰

Manaslu

マナスル登頂 30日間の記録

（8,163m）

文・写真　島田 稜（東京本社）

「精霊の山」マナスル

世界に14座ある８０００m峰の中で、比較的に登りやすい山が３つほどあるとされます。その一つチョーオユーは基本的に中国側から登るのですが、２０２２年は入国の問題で閉ざされていました。そのため今年は、同じく登りやすいとされるマナスルに登山者が集中しているとのことで、マナスルB.C.(4,850m)に到着した私の目に飛び込んできたのは、７００近いテントが立ち並ぶ異様な光景でした。例年の倍以上の登山隊がひしめき合っていました。公募隊のガイドや世界各国からやってきた登山メンバー10名と合流し、国際色豊かなB.C.で登頂の準備をしていきます。公募隊といっても、メンバーと行動を共にするわけではなく、それぞれのガイドと自分のタイミングで登ることができます。

登頂前には安全祈願のためのお祈り「プジャ」を行いました。B.C.に来る途中の村で見かけた、飲んだくれの親父と思っていた人が、僧侶としてやってきてびっくりしました。有名な方だったみたいです。謎の植物の種を飲んだり、謎の植物の蜜を舐めて儀式は終了しました。

その後、B.C.からＣ１(5,800m)へ登り高所順応を進めていたところ、高熱を出してしまい、サマ村へ下山して３日間ほどダウンするトラブルに見舞われました。その後なんとかB.C.に戻り、コックさんに消化の良い食べ物をリクエストしたところ、ガッツリとハンバーグ定食が出てきました。

緊急事態発生

登山を開始する数日前にはＣ４の急斜面で大規模の雪崩が発生。死者も出てしまいました。やはり８０００m峰は甘くないと思い知らされます。一方で不謹慎かもしれませんが、雪崩が発生した後は雪が削がれるので、今度は雪崩が起こりづらくなります。翌朝、他のメンバー全員が上に登るという情報のもと、私も危なそうなら途中で引き返す心づもりで出発することにしました。

B.Cより上に行く時は、クレバス（氷の裂け目）だらけの氷河を登っていかなければいけません。基本的に安全なルートに固定ロープが張られているのですが、ない場所もあるし、雪で埋まっていたりもします。そのため自分で道や方向を理解しつつ、補助としてロープを使うという姿勢が必須です。

【用語解説】B.C.…ベースキャンプの略

【用語解説】C1 ～ C4…Camp1 ～ Camp4 の略 ／ サマ村…マナスル山麓の村（3,800m）

山頂を目指して

C1に到着すると、先に最終アタックに挑戦し撤退してきたメンバーと会いました。他のメンバーも強風や高山病で次々に撤退していき、我々の公募隊メンバーで残っているのは私と他2名のみとなりました。

C1で一泊し、翌日はC2(6,270m)へ。ひとつひとつの高さは5～8m前後で短いですが、ユマールを使って垂直に近い登り上げが必要な箇所が続くハードな区間です。ここで急遽、登頂にベストな天候は明後日より明日だという情報が入り、C2を経て一気にC3(6,650m)へと登りました。14時頃に無事到着。天候を確認し、今晩23時から最終アタックを決行することにしました。予定外に標高を上げたこともあり、念の為に酸素ボンベを使いながらしっかり睡眠をとるように努めました。しかし、酸素マスクを使って呼吸をするのは慣れが必要であり、仰向けであることや繋ぎのダウンスーツに着替えたことによる寝苦しさも相まって、すぐ寝るのが特技の私ですが、1時間ぐらい寝付けない夜でした。

そしていよいよ最後の挑戦です。暗闇の中歩いていると、登頂を断念して下山してきたメンバーと会いました。この場所では一つ間違えたら致命傷です。英断だったと思います。B.C.での再開を約束して別れました。

その後、クレバスをいくつか渡ったら急登に差し掛かります。3日前に雪崩事故が起こった場所です。ここはとにかく、ひたすら急な斜面が続き、平坦な部分は皆無。しかも向こう側から突風が吹いてくるので、細かな雪が足下を流れ続けていて、傾斜のある雪の川を登り続けているような感覚です。ところどころ大きく硬い氷で覆われた場所もあり、足が置きづらく緊張しました。経験したことが無い辛さに、久しぶりに山が嫌いになりかけました。

なんとか4時30分にC4(7,400m)にたどり着き、私のガイドの仲間が設置したテントで休憩させてもらえることになりました。持参した服をさらに着込んで、気がつけば1.5時間も休んでいました。強風が激しく半ば諦めそうにもなりましたが、朝日が出てきて少し元気になったので6時30分にアタック再開！

高度が上がるにつれて、5歩進んでは数秒休むといった厳しい状態でした。しかし、ゴーグル越しに見える細かな雪が、朝日に照らされて輝きながら流されていく様子、雲の上の限られた大地にいると感じる景色はただただ美しく、息を切らして立ちながら休んでいる時、足下しか見ていなくとも、その風景に見惚れていました。見惚れることができる精神的余裕があることを嬉しく思う自分がいました。

遂に標高8000mに達し、2021年まで山頂とされていたピークを過ぎます。真の山頂は道が危険な為、かつてはここで行き止まりでした。ガイドのチェパ・シェルパさんが「あと少しですよ。ビデオ撮ります！」って言ってくれたので、力を振り絞って「うぉー登頂！」と叫んで何とかたどり着いたら「はい、じゃあもう少し行ったら山頂です。」と言ってきて、ここじゃないんかい！とコントみたいなことが起きましたが、さらに力を振り絞り、9月30日11時にマナスル山頂(8,163m)に到達できました。

山頂では到達した喜びより、果たしてここから無事に帰れるのかという不安の方が大きかったのを覚えています。深呼吸をして下山開始。最も高度感のある懸垂下降とトラバース地点を過ぎると、西側に何となく低く感じるアンナプルナ山群を遠望できましたが、疲れのせいで味わうことなくほぼ無心で下りました。無事にC3に着いたのは16時。泥のように眠り、翌日の朝9時頃に下山開始。自分で感じている以上に身体が疲弊しているらしく、歩いては度々休憩が必要でした。懸垂下降など、いつもは何も考えずにできることが、自分の身体を支えているだけで息が切れました。6000mを切るとスピードを出す余裕が出てくるくらい元気になってB.C.に着きました。しかしこの日は公募隊の動きに合わせてサマ村まで下らなければならず、一気に標高差3000m以上を下るのは初めての経験でした。

挑戦を終えて

まずは登頂ルート開拓に関わった人々、初登頂者達への畏敬の念が非常に高まりました。私も頑張りましたが、既に厳選されたルートをたどったわけで、ルートファインディングは基本的にしていません。ルートを選ぶのは何度も試行錯誤と計算が必要になるので、同じ登頂者であっても天と地の差があると改めて感じました。下山直後は精神的な疲労と共に恐怖もあり、もう二度と8000m峰は登らなくて良いと思いました。しかし、今となっては、チャンスがあるならまた挑戦したい気持ちもあります。とにかく山が巨大で、いくら歩いてもまだまだ続く。人によっては延々と目的地に着かないのは地獄かもしれませんが、過程を楽しめればこそ、大きな山への挑戦はたくさんのロマンとドラマがあると思います。

【右ページ上】右／マナスル B.C. は標高4,800~5,000m までテントがひしめき合っていた　中／プジャの祈りを捧げてくれたサマ村の僧侶　左／公募隊のメンバーとベースキャンプにて合流　【右ページ下】右／ Camp2 へ続く登攀部　中／ Camp2 へ向かう途中で迂回した大きな雪壁。簾のように垂れる氷柱群が美しかった　左／ PM11 時Camp3より発つ。いざ山頂へ

【左ページ】右上／マナスル山頂直前の登り　中／マナスル北峰 (7,157m) を見下ろす。右下で僅かに影から切れて日が当たっている細い台地に Camp3 が見える　左上／山頂にて。西遊旅行の皆さんからいただいた日本国旗を掲げる。登頂できなくても一生の宝物だと想いながら持参した。　左下／マナスル山頂 (8,163m)